

ス  
ー  
パ  
ー

ー



弁  
護  
士

ス  
タ  
ー

レ  
ン  
ジ  
ャ  
ー  
G

ス  
ー  
パ  
ー  
☆  
弁  
護  
士

スタ  
ー

僕は脈絡もなく異議を出したり意味もなく検察官請求証拠を不同意にしたりして裁判官を困惑させることを趣味にしている。その態度は親から譲り受けた性悪に由来するものだったが、期せずして僕の依頼人たちを無性に喜ばせていた。だが、どうやら肝心要の妻を喜ばせることには失敗したようだ。

ある日、彼女は近い内に子供を連れて出て行くと僕に告げた。僕はそれを諧謔かいぎやくの湿る何かの冗談だと思った。だから、妻の別居はハーグ条約※iに違反する連れ去り別居に該当するだろうか。そんな訳があるはずがない。それが裁判所で通用しないことはスーパースター弁護士である僕自身が誰よりも知っていた。

伽藍堂になったマンシヨンのベランダからふと空を見上げると結膜炎と相俟って太陽の触手が無限に分岐している。幾千万カンデラの陽光に圧せられ、僕のあまりない背丈が縮まりそうな気がした。季節はまだ初夏だというのに何て了見の日差しだ。妻は県外でも市外ですらない、上の区から下の区に近所に子を連れ去っていた。

「小学校の学区を変えると連れ去りと認定される可能性が高くなります。」

僕が顔も知らない主婦にする無料相談のアドバイスで妻は自然と学習を積み重ねていった。一体どうしてだ。僕はこうならないように学のない高卒の女と結婚したというのに。

どうしてそうしたかという、インカレで知り合って結婚した僕の両親を間近で見てもたからだ。英語訛りのある母が父を夜な夜な言葉攻めするのは母が国立大学を出ているからだと幼き僕は踏んだ。僕は幼少期に思った、決して国立大卒の女と結婚してはならない。だから僕の小学校の卒業式で語った将来の夢はこうだ。僕は大学に行くけど、高卒の女と結婚します。

そんな幼少期の自らの教えに忠実に生きていた僕だが、これは自身のトラウマの虚しい投影に過ぎなかったのかも知れない。僕は国立大学に行くことだって出来たが、私立大学に進学した。何故なら国立大学に進んだら、罷り間違まかって国立大学の女と結ばれてしまうかも知れなかったからだ。僕は数学も出来たし、物理だってクラスで一番の成績を取ったことだってある。だけどセンター試験は受けなかった。センター試験を受けて罷り間違まかってセンター試験を受けた女と縁由になつたら一大事だ。僕は私大のマニアックな問題に対応するために世界史の年号を覚え過ぎて藪やぶ睨みになってしまった眼で僕の父を恨んだ。

僕が愛用していた有料の優良マッチングサイトによれば妻の趣味は将棋だ。僕は将棋と囲碁の区別が付かない。妻はある時酔っ払って「私、奨励会に所属していたことがある。」と言った。ただ、僕はそれを「昔、犬を飼っていたことがある。」や「昔、ピアノのコンクー

ルで入賞したことがある。」と同列の情報として受け取っていた。所詮は高卒の女が言うことで大した意味はない。ただ、胸の小ささが気になっていた。本人はEだと言っていたが、どう見てもどう触ってもC位の大きさしかなかった。

学歴がなくて胸の大きな女と結婚すれば人生安泰だと真剣に考えていた。乳がんで若死にするリスクを差し引いても今だってそう考える。その逆は不幸だ。学歴のある女は概して胸がない。センター試験を受けたことのある女の胸はべちゃんこだ。胸のない女は学歴があり賢い女性である確率が高い。そして僕の言うこと為すことを全て自身の浮かばれない生き霊の投影と看做し、夜な夜な僕を言葉責めする。そんな人生は恐怖だ。それは、数百匹のマダニが一斉に僕の柔らかい皮膚に頭を突っ込む様を想像させる。

※1 ハーグ条約Ⅱ1980年にオランダのハーグで採択された「国際的な子どもの奪取についての民事上の側面に関する条約」。監護権の侵害を伴う16歳未満の子どもの国境を越えた移動を適用対象としている。

妻が選んだ弁護士はキレキレの弁護士でもなく、細長い自社ビルで本をいっぱい出している東京の家事スペシャリスト集団でもない。この地方都市で未だに法テラス※2の配転を受け続けている伝説の女弁護士「海老寺蕾」えびでらつばみだった。

僕は3次元の海老寺蕾を見たことがない。ただ、海老寺一派の急先鋒豊田とよたマツハと一騎討ちしたことがあった。豊田マツハは仁王断ちして僕の反対尋問に異議を出してきた。「先ほど代理人がおっしゃられたフレンドリーペアレントルールって何ですか？」と。牛乳瓶のような眼鏡を掛けた分かりやすい裁判官が「被告代理人は説明してください。」と言う。僕は一通りの説明をした。「高葛藤※3の夫婦でも離婚後は父と母として仲良くしなければならぬルールです。」と答えたのだ。薔薇は何色ですかの問いかけに薔薇っぽい色ですと答えたようなものだった。豊田マツハは腹式呼吸を一つした後「そんなものは存在しないよ。」と吐き捨てた。

尋問後、仄暗いほ駐車場ほで豊田マツハは冗談のようにリアに「TOYOTA」と太文字で書いてある逆輸入されたトヨタ製のピックアップ車から出て来て自慢の推定Fカップのホルスタインを揺さぶらせながら、立ち尽くす僕のこめかみ付近に目掛けてこう言った。「私はあんなものは認めていなんだよ。共同親権論者の戯言たわごとだかな。分かったかこのドリチ

ン野郎。」と。控えめに言つて、僕は路上で胸を触られた女子高校生の様だったと振り返る。その裁判は見事に敗北し、惨めにも控訴審を解任させられた。これは僕の名誉に関与する話だからエクスキューズするが、これはまだ僕がスーパースターになる前の話だ。海老寺一派にとって女性の幸福が全てでそれ以外はない。つまりは女性の幸福に照らすと夫は愚か子供の幸せもどうだって良い。海老寺式フェミニズムは徹底されていた。刺身のツマ、その中でも大葉でも人参ですらなく大根と同等に扱った。

受任通知には「今後一切のご連絡は当職までお願い致します。」と紋切り型のことが書かれてあった。電話番号は既に連絡帳に記されていた。試しに掛けてみようと思った。「お久しぶりです。修習の時、県庁通りで立ちシヨンベンをして一晩虎箱に入った樽井と申します。覚えているでしょうか？」とでも言つて世間話でもしようと思つたが、無機質な事務員が「先生は本日、終日不在です。」と告げた。

電話を切つた後、確かに常習的に立ちシヨンベンをして一度、虎箱にぶち込まれたが、誰にも迷惑など掛けていないことを思い直した。当時の僕は法律家の卵として可罰的違法性の限界に挑戦していた。立ちシヨンベンあくまでその挑戦の一環であつたし、落ちていた一円玉も何も考えずに拾つて財布の中に入れて占有即所有と混同を生じさせた。とは僕はいえ僕は自分が思っている以上に当惑しているようだった。当惑に任せて妻に電話を掛けようと思う。大体「今後一切のご連絡は当職までお願い致します。」には何の根拠もない。ある日、定年間際の裁判官に聞いたことがある。和解成立の儀式をする予定だったが、書記官がお腹を壊してトイレからの御帰還待ちだった。定年間際の裁判官は「あれはお願いですよ。こうやつてお願いしているのにそうしないのは止めて下さい。」と言うことです。僕は「その法的根拠つてあるのですか？」と尋ねた。定年間際の裁判官は言つた。「そうですね。強いて言えば薄い不法行為です。」

僕は可罰的違法性の限界に挑んだかつての英雄として妻の携帯を鳴らした。幾度か漣の音がして、その音は季節外れのしけた線香花火のようにふと消えた。暫くすると末尾「0110」の裸番号から電話がある。出てみると近所の警察署からだつた。或る伝説があつた。海老寺先生は連絡に出ず、痺れを切らして直接本人に電話すると警察から電話がある。しかし、それは伝説でも何でもなく、現実に僕の目の前で起ころうとしていた。出てみると「もしもし樽井さんですね。奥様に何の御用でしょう。」と女性の警察官が静かに言つた。昔凶鑑で見たエーゲ海の辺で佇む裸体の女性の群れが目に見え浮かんだ。深海魚のように浮き上がつて来た幼き記憶を頼りにすれば、女性たちの群れは女性の連帯を象徴するとの

ことだ。

子連れ去られた男がとる方法は家族法上たつたの一つしかない。それは3点セットと呼ばれる。子の監護者の指定と子の引き渡しの審判、そしてそれら審判前の仮処分申立てである。最後は満足の仮処分と呼ばれるもので、文字通りその後の審判の行く末の全てを占い、その勝敗が雌雄を分けた。負けたことを忘れて闘い続けたことがある。だが、僕たちは永遠に飛び続ける鳥のようだった。翻ると初めから死んでいた。

海老原蓄率いる蓄一派が編み出した手法の一つに仮処分期日の無効化がある。その手法を有り体に説明すると、まず指定された期日の直前まで受任事実を明かさず、その直前で受任したこととして期日変更を上申する。その後新たに指定された期日は、不自然な一派内での代理人弁護士との辞任と就任を繰り返すことにより、しこたま期日を後に延ばす。最長にして6ヶ月とも言われている。勿論、代理人制度の悪用だが、そもそも制度とは不合理の糸がタペストリーのように織り込まれているものだ。そうこうしている間に監護体制を盤石にして、家裁の調査官が入った後にはもはや後の祭り状態だ。「えっ、お父さんって、誰？」って具合に。だから、たとえスーパー弁護士である僕がその輝かしい研鑽をバックグラウンドにして我が子を取り返す手続きを取ったところで、出来上がるのは父を

忘れた子と廃人となったお父さんである。でも僕はやがてこの状況にもさえ慣れるだろう。まるで僕がスーパースターになったように…。

とはいえ、僕は自分の息子の居場所を知っていた。それは夕暮れの小学校の校庭の隅だ。彼は決まった時間にそこで雲梯を上下運動する。僕の長男は小学6年生だが、その知能と同様に上腕三頭筋が異様に発達していた。長男は受験勉強しかしていない。なのに、上腕三頭筋はそれ自身がまるで意志を持っているかのように、クワガタに喩えることが許されるなら深山クワガタの上顎のように発達している。そして、彼はその発達した上腕三頭筋を恥じらっていた。夏でもダボついた服を着てそれを胡麻化していたが、長男の上腕三頭筋はそれ自身が意思を持つように自己主張する。妻はその恥じらいの謂れを知らなかったが、僕は知っていた。

※2 法テラス⇨法律トラブルを抱える人のために様々な無料サービスを行っている、国が設立した「日本司法支援センター」の通称。

※3 高葛藤⇨離婚に至るまで揉めるような険悪な夫婦関係のこと。

夕暮れの小学校に向かう。サッカー少年たちが芸術作品さながらの大きな壁に向かってボールを蹴っている。そこから少し離れて常に煙の立ち昇る無人焼却炉の近くに雲梯はまるで神からの試練かのように六本並べて地面とまっすぐに立てられていた。僕は長男に近所のおじさんがするようにパタゴニアの大自然を彷彿させるほどのほんのり甘い微糖の自然さで話し掛けた。

「ニュートン算はまだあの解き方で解いているのかい？」と僕は言った。

「あの解き方はイマイチだな。お父さんの解き方でやった方がいいな。」ニュートン算とは例えばお風呂の水を貯めているのに栓が抜けているみたいなどうしようもない状況でお風呂が満杯になる時間を算出する特殊算だ。そして、蛇口は必ずしも一つではなく、それぞれ蛇口から出てくる水は均等ではなかったりもする。僕は中学校受験をしていない。改めてこんな馬鹿げた問題があること自体が信じられない。そして、僕は長男が解くニュートン算の解き方が理解できなかった。

「もちろんあの解き方で解いているよ。正解が出ればいいってパパがいつも言うのだ。勉強だからって。」と少し驚いた顔を示しながら長男は言った。

「つまりは、あれがお前のやり方なんだな？」

「それはママについて行ったボクへの非難を含ませた掛詞かけことばかい？」と長男は言った。凶星だった。彼は続けた。「俺は俺のやり方でパパを超える。センター試験を受けるんだ。パパが受けなかったね。」

「いつかドーバー海峡を泳いで渡りますみたいに言うね。あんな試験は碌碌でもない。」

「ボクはそうは思わない。ビブンセキブンの問題だって出るしね。パパはその前で腹が痛くなって辞めただろ、算数。ママが言ってたよ。ビブンセキブン面白いのに勿体ないってね。」

「ところで、今どこに住んでいる？」と僕は痛くなりそうな腹を押さえながら尋ねた。

「それって本気で聞いている？」と長男は言った。

「本気の訳がないだろ。それではまずはその理由を教えてやろう。」と言い淀んだところで「スーパースターだからだろ？」と小学校6年生の長男が先じた。

「いい加減にそのキャラをやめてくれって言ってるんだ。」

「キャラではないさ。そして言葉の綾でもない。」

「いくら何でも裁判にマントをつけてくのはやり過ぎだと思うよ。すまないが、パパとは

話してはならないとママの弁護士が言っている。」

「お父さんも弁護士だ。」

「パパよりもっと偉くて優れた弁護士だよ。蓄つていうね。パパよりずっと偉くて優れた先生がパパと話しちゃダメだって言っている。だったら話しちゃダメに決まってるじゃないか。」

「そんなの戯言だ。」

「では、信じてはいけない理由があるかい？あつそういうえば、パパ蓄先生の受任通知を受け取ったのにママに電話したらしいね。」

「なんでそんなこと知っている？」

「蓄先生がママと話していた。それ法律で禁止されている直接交渉っていうらしいね。弁護士がゼツタイにやっつてはいけない。蓄先生がママの代理でパパのことを弁護士会に訴えるらしいよ。チョウカイ何たらつて請求だ。あんまりにもパパが惨めだから言っちゃつたよ。つい口を突いて出たんだから悪意はないよ。事実だしね。これって真実？まあどつちだつていいや。ついつい言っちゃつたのは事実の方だね。」

「お父さんはお父さんとしてママに電話したんだ。それの何処が悪い。」

「何処が悪い？ブーだ。それは事実じゃなくて評価さ。評価じゃなくて事実を訊ねないと。ところでさつき、パパ自分のことを弁護士だつて言つてなかつた？」

いくら預けるところがなかつたとは言え、こいつを法廷技術研修に連れて行ったのを後悔した。長男は期別年齢に関係なく受講生の弁護士を「この子」と呼ぶ有名な宗教団体の教祖に似たキ印の刑事弁護専門弁護士に「ブー。それも評価だね」と諭されている僕にそうしたようにヒッヒッと笑いながら再び雲梯を登り始めた。小さい頃、早朝のテレビ番組で観た椰子の木を登るモンチツチさながら小気味よく雲梯を登っては降りた。しばらく奇妙な上下運動を繰り返す内、長男は神からいかづちを喰らったかのように激しく目を瞑りながら蠕動ぜんどうした。

「控えめに言つてパパはとんまだね。お菓子で言えば、何だろ。バナナスプリットみたいだ。ところで、あの動物は何て名前だつて？ジュゴン…。ああマナティだ。」

僕はぐつたりと動かなくなった長男にもっともつと幼かつた頃の天使の幻影を見て、賽銭箱代わりの半ズボンへ千円札を振じ込み、その場を後にした。

マンションに帰るとチャイムが鳴った。エントランスのモニターを見ると赤い線の入ったヘルメットを被った郵便局の配達員が立っている。汗みどろの配達員の胸には茄子紺色



の封筒があった。その色の封筒が示すのは一つしかない。特別配達と記された弁護士会からの封筒を開けると案の定、綱紀委員会の審査開始通知書と妻名義の懲戒請求書が入っていた。内容は予想通り僕が妻に電話したことが弁護士として「品位を失うべき非行」に当たると言うものだったが、驚くことに請求者手続き代理人は海老寺蕾である上、綱紀委員会の委員長のところにも海老寺蕾の名前があった。ゆっくりと瞬きをして確かめたが、そんなことをしてみても海老寺蕾という名前は変わることがない。同姓同名の弁護士がいたのだろうかと思ったが、そんな訳もない。

気を取り直して新聞を読んだ。記事の内容はまるで頭に入って来なかったが、暫く読み進めると衝撃のスクープが目飛び込んで来た。地方版の事件欄に連続放火殺人犯の記事に連なって「樽井正義弁護士（38歳）離婚紛争の最中に妻に直接交渉した疑い。所属弁護士会が事案の審査を開始。」と顔写真付きで報道されている。これで懲戒請求が通るも通らないも僕は世の中から事実上の懲戒を受けることとなった。ただ、幸か不幸か僕は他の弁護士のような順応主義者ではない。足繁く弁護士会に足を運んで、愚にも付かない会長選挙や憲法を考えるミュージカルの練習に参加したことは一度もない。彼らは会派を組み、万が一懲戒請求が来たとしても会派の領袖に揉み消して貰おうと息を吸って吐くように胡

麻を擦り、もはや目に見えないほど高速で尻尾を振り続けている。そして、僕が強制的に所属させられている弁護士会に会派はなく、4K深紅の共産党単独政権だ。この弁護士会があるお陰で僕は純粹な弁護士として存在することはない。自分自身の品位が赤い奴等によつて勝手に決められてしまうからだ。しかし、それで構わない。何があったとしても僕がああ順応主義者の群に加わることはない。僕はスーパースターだ。たとえ本当に懲戒処分を食らっても気を取り直してマントを新調しに行くだろう。

それから程なくして僕は手術台上がった。ドクターはTSB代表の鏡健一だった。僕と鏡医師の出会いには10年前だ。医大生だった彼が駅でスカートを盗撮した罪で捕まった頃からの付き合いだ。親戚一同を引き連れてファミレスに来た被害者はセルライト波打つ淑女だった。国選だからお礼は出来ないとはいつつ、差し押さえを免れた動画をお見せしたいと言ひ、僕は有り難くその感謝の意に乗じた。鏡は想像を軽々と超えて来る病的なデブ専だ。その後、彼は脂肪吸引を極め、美容業界で成り上がった。今では全国に多くの支店を持つ経営者で、メスを持つのは久しぶりだと僕に告げた。鏡の扱う電気メスのジジジと

いう音が手術室に響き渡り、それがリズムを持ち始めて周を描くと、僕は初めて手術室に風が吹いていることを知った。

「これって、機能は果たすのですか？」とモーパッサンを読んでそんな痩せぎすの女性研修医が言う。

「すみません、先生。彼女は東大の理三を卒業しているんです。」と鏡は言った。

「大丈夫だよ、鏡。東大出つてことはセンター試験を受けてるから普通の女じゃない。きちんと機能を果たすとその子に伝えてくれ。」と僕は言った。

「もちろん機能は果たすよ。君、男性経験はあるんだっけ？」

「ないです。」とモーパッサンを読んでそんな女が答えた。

「自慰行為はするかね？」

「それは毎日します。」

「そうだろうね。意識の揺れが少ない。君は内定だ。」と鏡は言った。「来月から渋谷院の副院長をやつて貰う。赴任後は忙しくなる。その前に温泉旅行にでも行きたまえ。一緒に行く男性はいるかね？」

「えっ、居ませんよ。そんな男性。」

「そうか、では手配しよう。後で好みのタイプを伝えなさい。怖がることはない。心配は要らない。全て上手く行くからね。」と鏡は優しく微笑んだように見えた。

ふと興味が湧いた。その処女喪失旅行に参加してみたい気持ちさえ芽吹いた。それは旅行ではなく旅になるだろう。彼女はモーパッサンから卒業し、新しい人間になる。「女の一生」の始まりだ。

「少しいいかな。好きなタイプってどんな感じの人？もちろん答えたくなければ答えなくていいけど。ただ忘れて貰っては困ることは、僕は初対面の君に対して殆どの全てを晒け出してる。今となつては包み隠すことなくね。」

僕の柔らかな核心を優しく撫でていた手術室に流れる緩やかな風が止み始めた。マスク越しに見える鏡の顔が真摯になつている。縫合が始まったのだ。

「清潔感のある方であれば、それで良いです。」と彼女は言った。

「清潔感が、いい言葉だね。僕のそれはどうなるかな？」

「それですか？」

「それだよ、それ。さつき君が言った清潔感に関するそれ。」

「あつ、なるほど。今日以降鰻登りになると思います。きちんと機能を果たせばの話です

けど。」と彼女は頬を赤めながら朴訥に答えた。

僕は彼女の旅が実りのあるものになることを心から祈った。

「鏡、分かっているだろうな。」

「分かっていますよ、縫い目が見えないように綺麗にやっています。」

「そうじゃない。清潔感の溢れるのを手配してくれ。バルサンみたいに清潔感がモクモクと出ているのを。」

「ああそつちですか。先生、セクハラですよ。」と鏡はおどけて言った。縫合は終わったようだった。

「お前にだけは言われたくないよ。この一大事にべちゃくちゃ喋りやがって。」

この手術を受けようと思ったのは3週間前のことだ。マンションのチャイムが鳴るとモニター越しに茄子紺色の封筒を持った配達員が立っていた。妻からの懲戒請求の答弁書のベ切りはまだまだ先だった。一体何の知らせだろうと封を開けると新たな懲戒審査開始通知で請求者は豊田マッハであった。内容は対象弁護士が裁判所の駐車場で請求者に対し「その胸って天然ですか？」というあたかも請求者が豊胸手術を受けたことを彷彿させる発言

をしたということではそれは「品位を失うべき非行」だということだった。確かにそれは品位を失わせる非行だろう。しかし、それは「このドリチン野郎」に対して答えたもので、バカと言われたからアホと言いつ返しただけに過ぎない。僕は「一体、どんな了見で自分がドリチンだって言うんですか？」とマッハに尋ねた。するとマッハは「ウチの若い弁護士が裁判所のトイレで見たんだよ。樽井のチンチンはチューリップなんてモンじゃない。小学生の時育てた朝顔が咲いた後みたいだったって。笑ったね。あんなに笑ったのはもう思い出せないよ。兎に角笑ったなあ。笑った、笑った。」と眼前でホルスタインを揺らしながら答えた。控えめに言つて僕は胸を触られたところじゃなく、前腕の毛が濃い中年男にパンツの中身を探られた女子高生生のような感じだったろう。そして、スーパースターになる前の僕がヒクヒク痙攣する口の角を必死にあげて放ったゴマメの歯軋りが件の天然発言だったのだ。

だったらこつちもやると言わんばかりに、懲戒請求書のドラフトを作成し、粗いが地響きが聞こえてくるかのような力強いデッサンが終わったところで、僕はマッハの品位喪失日を確認した。すると昨日でちょうど三年が過ぎている。懲戒請求は懲戒事由が発生してから3年で除斥となる。僕は制度上昨日付けで、豊田マッハを糾弾する資格を喪失

した。時効ギリギリで提訴して反訴の権利を實質放棄させる海老寺一派の遣り方がここでも炸裂した訳だ。そんなもって僕は、マルクレーゼもマルクスすら読んだことのない順応主義者がそのまま老成した奴等に小学校の帰りの会の公式版のような私的制裁を喰らうんだ。いや待てよ、と僕は思い止まった。マツハのホルスタインが天然か人工かの争点は立証に多大な困難があり、それ自体が新しい懲戒事由を生み出すパンドラの箱になる。これに対し、僕の性器がドリチンかどうかは立証が可能で、僕の指先の匙加減である。光明が差し、ネクターを飲みたい気分になった。しかし、すぐさま躊躇した。ただ待てよ、僕は実物の海老寺寺蓄にあつたことがない。僕の綱紀委員会における一世一代の展示による立証の最中、海老寺寺蓄が出て来て僕の包皮を戻してしまったらどうなる？それこそ物笑いの種子たねじゃないか。綱紀委員会の奴らは僕の審査を終えた後、「ちよつと早いですか、いっぱいやりますか？」とか何とか行つて夕方から飲み屋に入り、酒を飲むのだろう。そして、海老寺寺蓄は「つまみは何にしましょう。」の問いに「必要ないわ。だつてそうでしょう？」と答え、こう繋げる。「つまみはあの朝顔で充分よ。」と。そんなアンチクライマックスを傍目に猛り狂う屈辱感から一つの啓示が芽生えた。それはこうだ。僕はキングゴングにならなくてはならない。スーパースターを超えたキングゴングに。順応主義者の群れに一人で立ち向

かうキングゴング僕！

「分かつていると思いますが、暫くは絶対にセックスも手淫もしないで下さいね。」と鏡は念を押した。

「大丈夫だ。する気にならないし、相手も居ない。」

「えっ？」

「いや、何でもない。ソレらが全部出来るようになったら飲みに行こう。礼をするよ。」と僕は言い、鏡にサヨナラを告げた。

東京の街は華やいでいた。同時に少し懐かしい感じもした。僕は上機嫌になってダレスバッグから法廷用のマントを取り出し、これを羽織った。誰もがキングゴングとして生まれ変わった僕を見て振り返っているような気がした。スキップして家まで帰りたい気分だった。マンションのある駅に着いたが、そのまま帰る気になれず、長男がまだ受験勉強を始める前、僕がキングゴングにもスーパースターにもなっていない時に釣りをした川に行つてみようと思つた。僕と長男は川縁かわぎしから糸を垂らす釣り少年達の見様見真似でゴカイ

を餌にここでイサキの子供を釣ったのだ。橋の欄干の方に糸を投げるとイサキの子供はいつも簡単に釣れた。釣れた魚の白い腹がキラキラ海面上に浮かび上がると長男は大絶叫して喜んだ。僕はあの時、イサキの子供を釣るように簡単に長男を喜ばすことが出来たのだ。しかしその日の川は釣り人の担保もなく静寂を奏でるのみでその勢いを失っていた。イサキの子供も一匹も居ないような気がした。僕は今、イサキの子供すら釣ることが出来ないのではないかと思う。そう思った瞬間、股間に激痛が走り始めた。麻酔が切れたのだ。途端に自分がジーパンを履いて来たことに強い後悔を持った。ジーパンのジッパが金ヤスリのように僕を苦しめ一角の容赦もなかった。慌てて痛み止めを取り出したが、激痛のため唾が思うように出て来ず、飲み込むのがやっとだ。僕は慌てて包皮を戻そうとジーパンに手を突っ込んだ。包皮は今さつき切り取られ無くなっていった。ふと、背後に殺気を感じた。

背後には血の匂いに集まった鱗うろこの群れのように到底身の丈に合わない狂気じみたことを純粹に実行しようとしている少年たちの群れが立っていた。彼らは各々石礫せきれきを持ち、それを僕に投げようとしていた。少年の一人が放った石礫は頭を擦り、僕は遅れて石礫が回転して空気を切り裂く音を聞いた。僕は本能的に頭を腕で巻き込むように守り、本日突如として第一位に躍り出た急所の防御を忘れたことを知った。その直後、幾つかのヒットと共に

にホームランとなる一撃が僕の股間にクリティカルヒットする。神のご加護か意識は薄らいで行く。股間の激痛は綿雪が溶けるように消えて行った。

僕は死んだのだろうか。二人の天使が空から降りて来た。天使は赤と青の帽子を被った髭の濃い双子の障害者だった。彼らは奇声を上げながら、二人でクルクルとジルバを踊るように廻りながら空を浮遊している。彼らは髭も濃かったが、体毛も濃かった。僧帽筋が異様に隆起する体軀も180センチ以上はあった。僕はその双子をどこかで見たことがあった。ああそうだ。アイツらだ。いつも僕の勉強の邪魔をしていたアイツらだ。僕は司法試験を受けながらスーパーで食品レジを打っていた。パートが始まる前、僕はスーパーの2階で憲法の条文の暗誦あんじゅうをしていた。そうすると動悸が止んだんだ。でも、アイツらがスーパーの2階の奥のユーフォーキャッチャーをする日はぬいぐるみをゲットした日もしなかった日も階中を来日したてのロードウォーリアーズのように練り歩くもんだから僕の大事な暗誦は頓挫した。そんな日は決まってレジ打ちをミスって僕は社員にハンコをもらいに行かなければならなかった。ハンコを貰いに行く社員には僕より年下の奴もいた。僕

はもう既に30を超えていた。ところで、彼らの親はどこにいる？親らしき女性は居た。確かに保護者として彼らの後を追ってたが、足はおぼつかず老いていた。母親ではなかったかも知れない。父親はおらず、母親は蒸発したか、自害したのだろうか。だけど、彼らが僕の人生に何の関係があるというのだ。スーパースターの僕の人生と。

僕は司法試験に合格し、弁護士になった。ただ、僕が司法試験に合格した頃、ロースクール生が闊歩する時代に突入しており、僕ら古い司法試験を受けていた組は彼らに劣後した。ロースクール生は僕らに容赦なく口印を押し、当然というべく就職先もなかった。僕は仕方なく東京の雑居ビルに電話線を引き事務所として登録した後、法テラスからの国選通知の電話を待った。時折、同期から国選を廻して貰った。有名な渉外事務所に入った同期はいつも忙しそうだったが、僕は彼らが一体何の仕事をしているのか分からなかった。彼らは律儀に国選を廻してくれたが、彼らがランチと高級ワインでみるみる内に二重顎になっていくのに比例しまるでルンペンに残飯を分け与えるみたいな態度になって行った。せっかくあり着いた国選自体、裁判をどんなに頑張っても一件10万にも満たない。そんな矢先だった。

「貴方、あたし妊娠したみたい。双子だって言うの。」

「良かったなあ。双子か。賑やかになるなあ。」

僕は生まれて来る二つの命のために、国選の配点が豊かな埼玉に登録替えをした。東京に未練はなかった。東京はどういう訳か長崎以上にいつも雨が降っていた。所謂珈琲ゼリーのような憂鬱、何でもあるように見えて何も無い。いずれにせよ東京に僕の居場所はなかった。東京は僕にそのスカートの中身を見せてくれなかった。「東京、僕はお前とやれなかった。」言い得て妙だが、当たらずも遠からじだろう。それに引き替え、埼玉は素晴らしかった。何ていったって裁判所も東京よりたくさんあった。浦和、越谷、川越、熊谷、そして秩父！国産のハイブリッド車を買ってガソリンはいくら走ってもなかなか減らなかった。僕はその車で教習所以来の運転にドキドキしながら色々なところに接見に行った。「やあ、元気そうだね。顔を見てホント良かった。」ともの数秒も経たずに接見を切り上げて稼いだ2万円をポケットに忍ばせ、その足で妻と長男を遊園地に連れて行った。みんなジェットコースターに乗った後、埼玉の牧場で取れた牛乳から作ったソフトクリームを食べた。幸福だった。

「あのね、あたし丸高じゃん。それでね、羊水検査したんだ。そしたらね、ダウン症の

可能性があるんだって。半分くらいって言ってたけど、多分それ以上…。」と妻は項垂れながらそう言った。だが、その目は僕の心の中を確実に覗いていた。

「ああそうか。分かったよ。」とだけ言った。それ以上は何も答えられなかった。何を言っても失言となるからだ。それから1ヶ月経ったある日、妻は駅のエスカレーターの上から下まで一気に転び落ち、漫画みたくに腰を打ちつけて双子は流産した。もう4ヶ月で2匹のウーパールーパーのようだったと妻は病室で泣きながら言った。それは僕が心の底で微かに強く願っていたことだった。

その日以来、僕は赤と青の帽子を被った双子の障害者の幽霊を見るようになった。僕は幽霊を追い祓うように夜な夜な酒を飲んだが、昼間の動悸に耐えられなくなり精神科に行って抗精神薬を処方して貰った。幸福な生活をおよそ植物的な機能しか持たない二体のスライムにぶち壊されてしまう恐怖に慄き、それでも「墮ろしてくれ。」ということも出来なかった1ヶ月間の呪いに収監されたのだ。それは永遠を思わせる苦しみだった。

そんなある日、前任者が不慮の事故で亡くなったから判決だけ出廷して下さいとの連絡が法テラスから入り、その翌日国選通知を見るとテレビで連日放映された強姦事件だった。僕はその裁判の判決の前、法廷のトイレでビビって飲めなかった統合失調症の薬とウイスキー

キーの小瓶を眺め、どちらかを或いは両方を飲もうと心に決め、これを決め兼ねていた。だけどトイレのドアが猛然とノックされ、僕は慌ててその二つをヨレヨレの鞆にしまった。僕を探しに来た書記官に連れられて入った法廷は報道陣やくじ引きで入った傍聴人でごった返しており、かつて一度もない経験だった。弁護士席に座り、初めて被告人の顔を見た。検察官は神妙な面持ちで不安げな顔をしていた。裁判官が3人臨場して僕は立ち上がった。裁判長が重々しく口を開けた。

「それでは本件強制性交等被告事件の判決を言い渡します。主文、被告人を無罪とする。」  
法廷の騒めきの中、その瞬間、僕はスーパースター弁護士になったのだ。「僕はスーパースターだ。」と呟くことによつて。

「いやあ、災難だったね。野犬に襲われたようなものだね。最近の子供は大人しいと聞けど、そんなことないね。」目を開けると僕は近所の総合病院のベッドに居た。両足は中世ヨーロッパの拷問器具のように宙吊りになっており、その間に包帯越しにも分かる瓜のようになった僕の睾丸があった。

「竿は無事だったんだけどね。これ手術したばっかりでしょう。綺麗な縫い目だなあ。辜丸は酷くやられてるよ。一時は摘出も考えたが、ま、何とかなる。」とその医師は言った。ネームを見ると名前の前に部長と書かれていた。若い医者にはお手上げだったのだろう。

「そういうえば、今回の件。警察が何人かの少年を逮捕したらしいが、改めて告訴はするんでしょ？ 弁護士さんだもんね。当たり前かね。」と医師が尋ねた。

「いや、いいんです。僕の過剰敗北ですから。」

「過剰敗北？ 過剰防衛じゃなくて？」と医師が尋ね返す。

「僕はただ石を投げられただけで彼らを怯えさせることは何一つしていません。過剰敗北だったのです。僕は僕を釈放する予定です。」

「そうか、なかなか法律家の言うのことは難しくよく分からんな。」と言いながら、医師は医局に引き上げていった。ドアが閉められ、すぐに開いた。

「あつ、そう言えば君の奥さんと息子が見舞いに来てたよ。今日の昼だ。君は寝ていたがね。お子さん面白いねえ。バチが当たったんだねって言いながらヒッヒッヒって笑うんだよ。変な謎かけもしてきたなあ。」

「謎かけ？」

「そう、謎かけ。『一生来ないものって何んだ？』ってね。分からないって言ったらまたヒッヒッヒって笑うんだ。面白い子だよ。」

「明日です。」と僕は言った。

「ああそうか、明日か。なるほど。明日ね。」

「でも、今日。今だけかもしれないませんが、僕にはその明日が来たような気がします。」僕の本心だった。

やがて退院の日が来て、僕の辜丸は元通りの小ささになった。それでも歩くと酷い鈍痛だった。股間を引き摺りながら、病院を出ると慌てて担当の看護師が僕を追いかけて来た。「先生、忘れ物です。これですよ、これ。」

看護師が指すものは新調したばかりの僕のマントだった。僕はありつたけの声で叫んだ。「すみません、お手数ですが処分して下さい！」

僕はスーパースターではなくなった。一人の夫として、一人の父親として生きることでしょう。彼らはきつと帰って来るだろう。只の僕の元に。

終